

jh220027 非同期入出力機構を用いた大規模乱流直接数値シミュレーションコードの開発

代表：横川 三津夫（神戸大学）

撫佐昭裕，小松一彦（東北大学），石原卓（岡山大学），曾我隆，山口健太，山根悠輝（日本電気）
松本泰生，畑中裕翔（神戸大学）

本課題では、非圧縮性及び圧縮性乱流直接数値シミュレーション（Direct Numerical Simulation, DNS）コードに対し、変数の一時退避場所としてのテンポラリー・ファイルを作成し、使用メモリ容量を削減するコード実装を行い、その計算性能及びファイル入出力性能の評価を行う。特に、ファイル入出力に対しては、SX-Aurora TSUBASA が提供する高速入出力機構や非同期入出力機構を利用し、大規模DNS実行の可能性について評価する。

1. はじめに - 背景とコード実装の考え方

スーパーコンピュータの高速化、大規模化により、大規模乱流DNSが進展。大規模な乱流DNSデータベースが構築されている。

計算資源が不足し、さらに規模の大きいDNSが不可能

【ファイル利用による実装】

計算すべき物理量（変数）をファイルに保持し、随時、部分的に変数を読み書きしながら時間積分を行う。

（利点）

・使用メモリ容量が減少

（欠点）

・従来の計算時間に加え、ファイル入出力時間が増加
・ファイルシステムへの負荷が高い

計算とファイル入出力を非同期に実行出来れば、ファイル入出力時間を計算時間に隠蔽されることが期待される。

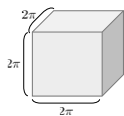
2. 直接数値シミュレーション（DNS）コードの概要

1) 非圧縮性一様等方乱流DNSコード（Box乱流）

領域 $\Omega = [-\pi, \pi] \times [-\pi, \pi] \times [-\pi, \pi]$ において

$$\frac{\partial u_i}{\partial x_i} = 0, \quad \frac{\partial u_i}{\partial t} + u_j \frac{\partial u_i}{\partial x_j} = -\frac{\partial p}{\partial x_i} + \frac{1}{\text{Re}} \frac{\partial^2 u_i}{\partial x_j^2} + f_i \quad \text{in } \Omega$$

u_i :流速, p :圧力, Re :レイノルズ数, f_i :外力, 周期条件 on $\partial\Omega$



- 空間離散化：フーリエ・スペクトル法（3次元高速フーリエ変換）
aliasing errorは、 $\sqrt{2}N/3$ 以上のモードカットとphase shift法で除去
- 時間積分：4段4次ルンゲ・クッタ法

2) 等温を仮定した圧縮性乱流DNSコード

立方領域 Ω において

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \frac{\partial \rho u_i}{\partial x_i} = 0, \quad \frac{\partial \rho u_i}{\partial t} + \frac{\partial (\rho u_i u_j + p \delta_{ij})}{\partial x_j} = \frac{\partial \tau_{ij}}{\partial x_j} + f_i,$$

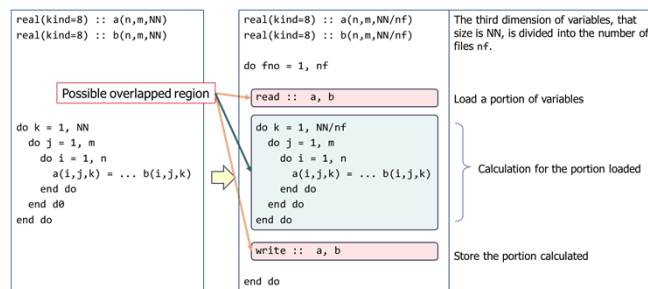
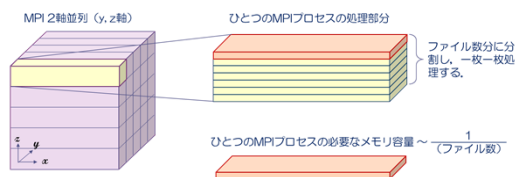
$$p = \rho c^2, \quad \tau_{ij} = \mu \left(\frac{\partial u_i}{\partial x_j} + \frac{\partial u_j}{\partial x_i} - \frac{2}{3} \frac{\partial u_k}{\partial x_k} \delta_{ij} \right) \quad \text{in } \Omega$$

u_i :流速, ρ :密度, p :圧力, c :音速, μ :粘性係数, f_i :外力, 周期条件 on $\partial\Omega$

- 空間離散化
移流項：8次精度コンパクト差分
粘性項：8次精度中心差分
- 時間積分：3段3次TVDルンゲ・クッタ法
- 高波数領域における数値振動の除去：8次精度ローパスフィルタ

3. 実装イメージ

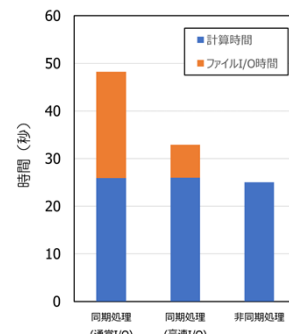
並列化コードで使用されている変数に対し、1つのプロセス中の変数をさらに分割し、個々のファイルに保持。メモリ量を削減。



4. 予備実験 - チェックポイントファイルへの非同期出力

時間発展熱伝導方程式を離散化したテストコードを作成し、途中経過を一定時間間隔でチェックポイントを取る場合について、SX-Aurora TSUBASAの非同期入出力機能による計算時間を計測した。

（計算時間） > （I/O時間）の時、計算時間にファイルI/O時間が隠蔽されている。非同期入出力機構の正常動作を確認。



5. 今後の課題

- 非同期入出力機能の性能評価
 - ノード直結のSSDファイルシステム vs. 並列ファイルシステム
- 非圧縮性、圧縮性乱流DNSコードへの実装と評価

6. 参考文献

- Y. Takenaka et al., Optimizations of DNS Codes for Turbulence on SX-Aurora TSUBASA, Sustained Simulation Performance 2019 and 2020, pp. 51-59, Springer, (2021)
- Y. Sakurai et al., Effects of the Compressibility of Turbulence on the Dust Coagulation Process in Protoplanetary Disks, Astorophys. J., 911 (2), p. 140 (2021)
- T. Ishihara et al., Second-order velocity structure functions in direct numerical simulations of turbulence with Ra up to 2250, Physical Review Fluids, Vol. 5, 104608, pp. 1-15 (2020)
- M. Yokokawa et al., I/O Performance of the SX-Aurora TSUBASA, Proc. of 2020 IEEE International Parallel and Distributed Processing Symposium Workshop (IPDPSW), pp. 27-35 (2020)